

映画 *Lolita* とアメリカ⁽¹⁾

deja - vu⁽²⁾

Lolita (1955/1958)は作者 Vladimir Nabokov を世界的に著名な作家にした作品であるが、出版は相当に難航した。40年代後半の牧歌的なアメリカ東部の大学町を舞台に、12才のアメリカの少女とヨーロッパから来た中年男性、しかも義理の親子である二人の性的な関係を扱っているこの小説は、1954年に完成したものの、アメリカの4つの出版社から断られた後、1955年にパリの Olympia Press から出版された。同社は、Henry Miller, William Burroughs、Lawrence Durrell, Jean Genet, Samuel Beckettなどの性を扱った特異な作品を出版しているが、英米で出版できなかったポルノグラフィの出版で有名なところである。Nabokovはそのことを充分認識せずに契約してしまったが、この出版が *Lolita*=ポルノグラフィ という印象を決定的にしてしまった。アメリカでは出版できなかったが、税関は持ち込みを許可したので、*Lolita* はフランスからアメリカにどんどん持ち込まれた。一方、フランス国内ではやがて *Lolita* は発禁になる。1958年にアメリカで出版され、半年間ベストセラーとなる一方で多くの図書館から排除された。書評でもポルノグラフィの扱いをしたものが多く、Olympia Press 版の *Lolita* を同年のベストの小説だと評価した Graham Greene やアメリカで出版された *Lolita* を早くから支持した Dorothy Parker は少数派に属していた。イギリスでは出版をうながすために Iris Murdoch, Philip Toynbee ら 21人の作家や知識人が署名運動を展開しなければならなかったほどである。現在では、*Lolita* は 20世紀文学の古典として位置付けられており、英文科で学ぶキャノンの1つになっている。ポルノグラフィとしてこの小説を読もうとして、凝りに凝った文章に苦心惨憺する者もないだろう。しかし小説の出版から約40年を経て、再び *Lolita* は受難の歴史を繰り返すことになる。Adrian Lyne によって2度目の映画化がなされたためである。

1993年 Lyne 版の映画 *Lolita* の制作が開始され、*Fatal Attraction* で脚本を担当した James Dearden、劇作家の Harold Pinter、David Mamet の三人に順次脚本が依頼されたが、Lyne の気に入らず、映画脚本の執筆はこれが初めてのジャーナリスト Stephen Schiff が脚本を完成させた。1996年の終りに完成はしたものの、この映画の配給権は3000万ドルとも言われ、スーパースターの出演していない映画で5800万ドルの制作費を回収できるだけの観客動員力があるかどうか危ぶまれたことと、pedophilia(子供を対象にした性愛)のテーマの2つの問題から配給会社が見つかず、公開のめどがたたなかった。映画製作中に、児童ポルノ禁止法(The Child Pornography Prevention Act)

が1995年と1996年の二度にわたって制定されたことも映画の公開を困難にした。性的な場面、あるいは性を示唆するような場面に18才未満の子供を使ってはいけないというこの法令に触れないように、6週間かけて専門の弁護士によるチェックを受けて編集をしたものの、公開のめどはたたなかった。この時期のアメリカでは映画雑誌や新聞で時々*Lolita*の記事が出ているが、必ず載っているのは、この法令にいかにかぶれないように映画を作ったかという楽屋話である。小説*Lolita*は、出版された国で禁じられ、出版できなかった国に受け入れられたが、映画も制作した国では公開できず、1997年小説と同じようにヨーロッパで先に公開されることになる。スペインの映画祭を皮切りに、イタリア、ドイツ、98年1月からイギリス、ベルギー、フランス、ロシアで劇場公開された。ラテン系の国ではあまり問題にならず、イタリアでは小説*Lolita*が急に売れ出すというおまけもあった。一方、ババリアで25%の少女が17才以前に性的な被害を受けていると言われるドイツや、ともにpedophileによる連続殺人事件がおこったイギリス、ベルギーでは上映反対運動がおこった。おそらく永久にアメリカでは公開できないだろうというのが大方の意見だったが、98年8月2日ケーブルテレビのShowtimeで放映することが突然決定された。テレビ映画として放映されるとアカデミー賞へのノミネートの権利を失ってしまうため、その前の1週間ロスアンジェルス映画館で急遽特別に上映された。そして9月25日からニューヨーク、ロスアンジェルスで劇場公開が始まり、10月からはその他の都市でも上映された。Lyneの*Lolita*はR指定(18才未満は大人の付き添いが必要というもの)であるが、テレビで放映されれば、実質的には何の制限もない。結局、大騒ぎが続いた後に、なしくずし的に一般公開が行われたことになる。

1962年にStanley Kubrickがすでに*Lolita*をMGMで映画化しているし、1980年代に少女の娼婦を演じたJody FosterやBrooke Shieldsの映画でもこれほど問題になっていなかったことを考えると、Lyneの映画の公開をめぐる騒ぎは社会状況の変化を如実に語っているといえるだろう。

How did they ever make a movie of *Lolita*?⁽³⁾

Kubrickの*Lolita*の予告編につけられたこのコピーが示すように、小説が与えた衝撃が冷めやらない60年代初頭に*Lolita*の映画を撮ることは確かに大胆な試みであった。

Kubrickのために脚本を担当したNabokovは、出版された脚本の前書きで、Kubrickの才能を評価しながらも、自分の書いた脚本のほとんどが無視されたことに対する不満を述べている。この映画のクレジットに原作と脚本の著者として名前が出ているにもかかわらず、実情は違っている。Nabokovが初めに提出した脚本が400頁を超える長さで、映画化すれば7,8時間になるものであったために、書きなおしを依頼され、改めてもっと短いものを書く。Kubrickはそれを採用するが、実際にはその2割程度しか使わず、自分自身の脚本にもとづいて映画を撮ってしまった。Nabokovは試写を見るまでそのこ

とを知らないままだったし、後日 2 番目の脚本を手直しして出版したものの、それも映画の公開からだいぶ待たなければならなかった。現在 Nabokov が書いた *Lolita* の映画用脚本として出版されているものは、実際にはこの 3 番目の版であり、それ以前の 2 つの脚本を見ることはできない。そのため、Kubrick が使った 2 割の部分を厳密に特定することはできないが、映画のプロット自体が相当に違っているので、細かな部分を採用しただけらしいことは見当がつく。

一方、Kubrick にとってもこれは満足できる映画にはならなかった。彼の *Lolita* は、いろいろな面で制限されていた。まずハリウッドの自主規制のルールであるプロダクションコードを遵守しなければならなかった上、カトリック団体 The Catholic Legion of Decency からの圧力も強かった。結局トラブルを恐れてアメリカを離れ、イギリスで撮影することになる。そのため小説の大きな魅力であり、重要な要素にもなっているアメリカの具体的な地域性が弱まり、舞台はどこか不特定の場所、室内劇的な空間となり、この映画に一種抽象的な雰囲気はただようことになった。40 年かかってロシアとヨーロッパを創造した後で Nabokov が小説 *Lolita* の中で発明した Nabokov のアメリカ、「美しい、信頼に満ちた、夢のような、広大な国」の魅力はこの映画からは抜け落ちている (*Lolita* 176)。

Pedophile である主人公の心理を描くことが Nabokov にとっての挑戦であったとすれば、その映画化は Kubrick にとっての挑戦であったはずだが、その主題を十分に描くことはできなかった。監督自身「Humbert と *Lolita* の関係のエロティックな面を強調することができなかった」ことを残念がっている (Appel 229)。実際、小説 *Lolita* の映画化ということがわかっていなければ、つまりなんの先入観もなしにこの映画を見てしまえば、Humbert が pedophile だということはわからない。ここには Humbert の心理的背景 初恋の相手である少女と死別して以来、9 歳から 14 歳の年齢層の少女にしか興味を持ってない がまったく描かれていないし、*Lolita* の年齢もわからない。*Lolita* 役の Sue Lyon は 12 才ではなく、17、8 才に見える。Humbert は、おそらくハイスクールに行っているらしい美少女ににすぐ「恋をして」しまう中年男性にしか見えないのであり、それなら大罪ではない。むしろ愛してもいない母親からの求愛を受け入れて、*Lolita* のそばにいたいのための偽装結婚をすることのほうが罪深いかもしれない。現在アメリカで販売されているビデオ版では、この映画は子供でも見ることのできる「指定なし」の扱いになっている。そこに原作の物語を投影して見るのでない限り、客観的に見てこの映画はとりたてて問題にはならないのである。実際には小説の亡霊がとりついていたかのように、映画の公開当時、サンフランシスコで Humbert 役の James Mason に話しかける人は誰もいなかったほど、この映画はタブーとして扱われた。

いわゆる少女趣味の映画は、Kubrick の *Lolita* をもって嚆矢となるわけでもない。ハリウッドの歴史的な少女趣味は、もはや定説になっているように思われる。それは少女に永遠の無垢を託したいアメリカ的な欲求とも見えるし、ハリウッドに伝統として見

られる、子供のような女と父親のような男という年齢においても体格においても差のあるカップルは、父権制の表象としても考えられよう。

Marianne Sinclair の *Hollywood Lolita* を読むと、サイレント時代の Gish 姉妹から、30 代で少女役を演じた Mary Pickford, 史上最年少のドル箱スター Shirley Temple から健康的な少女の魅力を発散した Judy Garland, Elizabeth Taylor の時代を経て、作る側も観客も少女の性を意識しはじめた 50 年代、60 年代の「ロリータ女優」達、そして 80 年代にそれぞれ少女の娼婦役を演じた Jody Foster や Brooke Shields まで、時代と共に性の意識と表現を強めながら、延々とその流れが続いていることがわかる。有名な話であるが、今では誰も否定しないハリウッドの少女趣味に潜むものを最初に指摘したのは、Graham Greene である。彼は当時の異常な Temple 人気が、少女の未熟なコケトリーを感じていることからきているとほのめかしたために告訴された。小説 *Lolita* がポルノグラフィではなく、すぐれた小説だと見抜く力のあった Greene は、同様に時代を先取りしすぎて、無邪気な幼児に対する異常人気の中に怪しいものを見抜いてしまったのである。

ハリウッドの少女趣味の流れの中で *Lolita* を考えてみると、この映画があまり「性的」ではないことに気づく。初めて性的な少女の魅力を意識的に主題にした 50 年代の Elia Kazan の *Baby Doll* (1956) のほうが、はるかに性的に露骨な映画であり、性を正面からとりあげた問題作であろう。これは肉体的には大人でありながら、精神的には赤ん坊のような 20 歳の若妻の話で、今日の視点から見ると、グラマラスなチャイルドウーマンを求めるハリウッド映画の伝統自体をテーマにしているように見える。プロダクションコードにのっとって、実際の行為はキスにとどまっているが、性的なアリュ ジョンやシンボルが散りばめられ、性的に濃密な映画になっている。これに比べると Kubrick の *Lolita* は、実際には性がほとんど存在しない映画になっていることがわかる。

結局、Kubrick の *Lolita* は誰をも満足させなかったように思われる。このような主題の小説を映画化するという一方で、保守層の反発を買った。小説の「忠実な映画化」を期待した、小説を読んだ観客の期待を裏切った。ポルノグラフィ的な場面を期待した、小説を読んでいない観客の期待も裏切った。ナボコフの脚本を無視したということから本人や遺族だけでなく、ナボコフ研究者からも好意的な扱いを受けてこなかった。あらゆる面で冷遇された映画なのである。

Kubrick は大胆に Nabokov を無視したように見えるが、この原作の存在はかなりのプレッシャーであったはずだ。*Lolita* は彼の 13 本の映画のうち 6 番目の作品であるが、当時 Kubrick は 33 才で、代表作といえる *2001: A Space Odyssey* (1968) や *A Clockwork Orange* (1971) などはまだ撮っていなかった。かたや Nabokov は 63 才で 40 年以上作家のキャリアを持ち、*Lolita* の成功によって世界的に著名な作家になったところだった。結果を見ると Nabokov の *Lolita* は彼の作品の中でも最高峰のもの 1 つだろうが、

Kubrick の *Lolita* は監督の将来を約束するものではあっても作品として充分満足できるものとは言い難い。他の Kubrick の作品では、原作は映画を支える側、彼の映画化によって光が当たるものだったが、*Lolita* では輝かしい傑作が習作になってしまったという恨みがある。「芸術的な完璧さが作品の長さによっているものでない限り、ほとんどすべての小説は映画にすることができる」という意見を持ち、実際にほとんどの作品を原作の翻案によって作った Kubrick であったが、*Lolita* では十分に力を発揮できたとはいえない (Jenkins 24)。*Lolita* を撮ったということは大なる挑戦だったが、同時にかなり損をしたといえる。有名作品の翻案の映画の宿命であろうが、小説を読んだ印象からの期待感が大きく、映画としては優れていても観客には評価されない、これが Kubrick の *Lolita* にもおこったことではないだろうか。

Who's afraid of Lolita? (We are) (John Leonard)

50 年代当時の多数派のアメリカ人にとって、pedophilia はこの世にあるまじき異常なことであり、この言葉あるいはそのような性癖を知らない者も少なくなかったらしい。小説 *Lolita* は、そのあり得ないことを 40 年代後半のアメリカ東部のミドルクラスの環境を舞台に描いてしまったために問題だったのだが、現在 pedophilia は「隣の家でおこっているかもしれない」ほどありふれた犯罪になってしまった。だからこそ、Lyne の映画の上映が問題になったのである。

現在のアメリカで pedophilia は非常に大きな社会問題になっている。まずその頻度が高く、American Humane Association, Children's Division によると、1996 年 1 年間で約 300 万件の児童虐待が報告されており、その中の 12% が性的虐待である⁽⁴⁾。被害が社会の階層のあらゆる面にわたっていることも特徴の一つであり、18 才未満の女子の 25%、男子の 10% が性的虐待を受けているという話は広く知られている。少なく見積もっても 20% の女性、5 16% の男性が子供時代に被害を受けているとする統計もある (Prevent Child Abuse America)。また加害者が子供の両親や親戚、教師、保育者といった保護者的な立場にあるため、外部から「見え難い」犯罪でもあることも問題の一つである。被害者が幼い場合、被害を受けていてもそれが後年になるまでわからないことも多く、被害を認識していても告発したり、外部に救済を求めることが難しいことも多々ある。日本では JonBenet Ramsey 事件が大きく報道されたが、あの事件は決して特殊なものではない。被害者が母子 2 代にわたる子供のビューティーコンテストの優勝者であったり、その家庭が富裕であったり、犯人が特定できなかつたりしたために現在でもアメリカでマスコミが盛んにとりあげ、今年になってからも 4 冊の本が出版されているが、この種の事件としては氷山の一角にすぎない。

さらに、アメリカでこれが大きな社会問題になっているのは、子供がその時点で被害を受けるだけにとどまらず、犯罪者や社会の不適應者は、子供時代の虐待 (性的虐待を含む) が原因だと考えられているためである⁽⁵⁾。私は 1997 年春から一年間研究休暇を

与えられ、アメリカに滞在する機会に恵まれたが、当時受けた印象では、新聞に報道されるような大きな事件の犯人が逮捕されると、子供時代にひどい虐待を受けている事実があったことが後日発表されることが頻繁にあった。また、かつての被害者が加害者へ、という図式を自分の身近に見ることもなった。私達の住んでいたニュージャージー州で PTA の活動資金を集めるために家々を回ってお菓子を売っていた 11 才の男の子がレイプされ、絞殺されるという事件があった。犯人は 15 才の高校生で、しかも前年に大人の男性からレイプされたということが、警察の記録に残っていた (*The New York Times* Oct 3, 1997)。1 年もたたないうちに被害者が加害者になるというサイクルが完了してしまっただけになる。この事件は自分自身が被害者と同年代の子供を持つ母親であることから、衝撃的な事件として鮮明に記憶に残っている。

子供時代の虐待が免罪符になり、本人に責任能力なしとするこの考え方への批判も当然ながらあり、Lyne 版 *Lolita* の公開の是非をめぐって書かれたものの中にも散見される。たとえば、「現代の嘘」(Kincaid) や「アメリカのヒステリー」「魔女狩り」(Podhoretz 34) などの批判がそうである。一方、トラウマ体験を克服するための積極的な活動もさかんに行われている。虐待の記憶を取り戻し、他者に語ることで初めてその体験を乗り越えて成長できるという考えのもとに、カウンセリングやセミナーがおこなわれる。受刑者同士がお互いの体験を話し合うセミナーが再犯の防止に効果をあげていることは日本のドキュメンタリー番組でも紹介されている⁽⁶⁾。ハリウッド映画はアメリカ社会の思想的動向をすぐさま取り入れる傾向があるが、たとえば 1997 年の映画 *Goodwill Hunting* (監督 Gas Van Sant) にこうした動きが肯定的に描かれている。この映画では、カウンセリングを受ける側である、養い親からの暴力に傷ついている主人公だけでなく、カウンセリングを授ける側の、妻の死から立ち直れない心理学者も、カウンセリングを通じて、共に人生に再出発を果たす。

pedophilia を防止する努力も積極的になされ、子供と性についてはかなりきびしい検閲制度がとられている。強硬派の例として有名だが、1997 年夏オクラホマでは、アカデミー賞受賞作である Volker Schlöndorff の *The Tin Drum* (1979) が子供のポルノグラフィとされ、ビデオテープの売買やレンタルが禁止され、警官が店頭や個人宅でビデオテープを押収した (Bernstein 23-24)。6 歳の児童がクラスメイトにキスをしたために停学になったり、下着姿の男児を使った広告が、pedophilia を連想させると問題になったことは日本でも報道された。

映画 *Lolita* のリメイクは、こうした社会状況のもとに現れ、その公開の是非をめぐっての言論によって、一段と pedophilia を前景化させてしまったことは確かである。マスコミには格好の話題を提供したといえよう。なにしろ、かつての社会主義圏の中心地モスクワですら公開されたのに、ご当地アメリカで見ることのできないハリウッド映画になってしまったのである。この映画が、法令に触れないようにするために、どのような工夫のもとに撮影が行われ、また弁護士立会いのもとに編集されたかなどの楽屋話

と、現代アメリカの社会問題 pedophilia、そしてハリウッドの偽善的な及び腰の姿勢、つまりリベラルを装っていながら、実は保守層からのバックラッシュを非常に恐れているという姿勢への非難というのが、当時の娯楽映画雑誌から総合誌まで、大方の記事の中で繰り返される三題噺になっていた。

原作に忠実な映画を作るといふ、映画を製作した側の思惑とはおそらく裏腹に、Lyne の *Lolita* は次第に Nabokov の小説を離れ、社会問題としての pedophilia と検閲制度についての映画になってしまったように見える。Kubrick の *Lolita* を見る観客がそこに描かれていない pedophilia を見ていたように、Lyne の *Lolita* を見る観客はそこに社会問題としての pedophilia を見ざるを得ない。

Humbert 役の Jeremy Irons はこの映画の母国イギリスでの上映が危ぶまれたことに憤っていたが、その彼が出版された Schiff の脚本の前書きとして書いたメッセージは、皮肉なことに小説 *Lolita* の前書きの部分となっている心理学者 Dr. Ray のもったいぶった見当はずれの話とよく似たものになってしまった。

This is a story that many people imagine they will find distasteful, especially in these days where the subject of pedophilia is so much in the public consciousness. I believe, however, that it has a place both as a piece of literature and as a film script. In today's society if we cannot understand human behavior, then how can we change it? How can we judge it? How can we educate our children about it? (Jeremy Irons, "Foreword" to *Lolita: The Book of the Film*. 下線は引用者による)

As a case history, "Lolita" will become, no doubt, a classic in psychiatric circles. As a work of art, it transcends its expiatory aspects; and still more important to us than scientific significance and literary worth, is the ethical impact the book should have on the serious reader; for in this poignant personal study there lurks a general lesson; the wayward child, the egotistic mother, the panting maniac these are not only vivid characters in a unique story: they warn us of dangerous trends; they point potent evils. "Lolita" should make all of us parents, social workers, educators apply ourselves with still greater vigilance and vision to the task of bringing up a better generation in a safer world. (*Lolita*, p.6. 下線は引用者による)

この映画の教育的効果を、まるで Dr. Ray のように大真面目に Irons が書いてしまうところまで、この 40 年間で *Lolita* の小説世界が現実のものとなってしまったのである。

現在であれば、Nabokov は pedophilia にとりつかれた人物を主人公とした小説を書くことはなかったであろう。その異常な精神世界が、現実世界にありふれたものでなく、

また自分自身の心理状況からもはるかに隔たったものであったからこそ彼はそれを主題に選んだのだ。彼の小説の主人公の多くが犯罪者か狂人かあるいはその両方を兼ねているように、Humbert も異常者で犯罪者である。この 40 年間に現実の世界が *Lolita* の世界を実現してしまったが、それは Humbert の地獄の業火に彩られたパラダイスではなく、ひたすら現実的で陰惨で汚らわしい世界、ちょうど *Lolita* を読みながらそこに pedophilia 以外のものを読むことができなかつた書評に書かれたように、かつて例を見ないほどおぞましいものとして実現したのである。

She was a child... (Edgar Allan Poe)

Lyne の映画は、Kubrick 版と違って「原作に忠実」と評されてきた。現在 Nabokov の唯一の遺族となった息子 Dmitri は亡き父のスポークスマンのような立場にいるが、彼もこの映画の忠実さを評価し、世界各地の公開初日に劇場に登場してスピーチをすることで、いわば「お墨付き」を与えている。Lyne の映画は Nabokov の小説に本当に忠実なのであろうか。

確かに Lyne 版の *Lolita* は、物語への忠実さという点については、Kubrick 版はもちろんのこと、ナボコフ自身の出版された脚本よりも、はるかに小説に忠実に作られているといえる。また、イギリスで撮影された室内劇風の Kubrick 版と違って、ノースカロライナ州で撮影された Lyne 版は、40 年代当時の東部の大学町や各地のホテルやモーターといったアメリカ的な細部を魅力的に描いている。Kubrick には果たせなかったが、性の場面をはっきり描くことができたし、*Lolita* を子供らしく見せることにも成功している。いくつかの場面では、Lyne の映画は小説よりも露骨に性行為を描き、反面 *Lolita* をより幼く見せてすらい。パジャマの上着だけを着た *Lolita* が Humbert の膝の上に座り、漫画を読みながら性交をしていることがはっきりわかる、非常に大胆に思える場面もある。そして *Lolita* の服装や髪型は小説の少女よりもずっと幼い。Dominique Swain は Sue Lyon と同じく撮影時には 14 才だったが、後者とは違って *Lolita* の年齢 12 才らしく見えるし、時には原作の少女よりもさらに幼く見える。小説の *Lolita* が映画スターに憧れて背伸びをする少女であり、Kubrick の *Lolita* がハイスクールの生徒のようだったのに対し、Swain の服装、髪型は子供らしいものが多い。たとえば、小説の *Lolita* は Swain のように三つ編みのお下げなどの子供らしい髪形では登場しない。

子供らしさは Lyne 版のオリジナルな小道具である歯列矯正器や大きな飴玉 jawbreaker などでも強調される。歯列矯正器は、ミドルクラスの生活様式と経済力、歯の美しさを重視するアメリカ人らしい衛生志向など複数のものを表しているが、やはり子供らしさに一番の比重が置かれている。初めて Humbert が見た時の *Lolita* は、芝生に寝そべて映画雑誌を読んでおり、Humbert に気づくと無心に笑いかけるが、歯列矯正器が光って笑みの無邪気さを強調する。同じ場面を比較すると、Humbert に心を惹

かれたことを表すかすかな微笑みを浮かべてじっとカメラを見つめる Lyon は、ほとんど大人の女と言ってよい。ここでの Lyon は原作と同じビキニの水着と黒いサングラスの姿で登場するが、ピンナップガールのパロディのように見え、身体の露出度が高いにもかかわらず、逆に身体性は希薄に感じられる。Kubrick 版の Lolita 全体に言えることであるが、抒情性を排した硬質な質感の画面づくりがなされ、カメラの眼差しには対象への距離が感じられる。それに対して、Lyne 版は情緒的でやわらかな質感を持った湿度の高い画面作りがなされている。この出会いの場面では、カメラは完全に Humbert の視線そのものとなり、濡れて身体に貼りつく薄いガーゼ状の布ごしに Lolita の身体をたどって行く。Lolita は百合の花に囲まれ、共にスプリンクラーからの水を浴びているのだが、ここに小説で繰り返される少女と花のメタファーの流れを見ることが出来る。同時に、ここでは小説よりも露骨に、百合のように鑑賞され、また欲望の対象となる、現実的な身体性が Humbert の眼差しに同化したカメラによって強調されている。

歯列矯正器はこの後も何度か登場するが、決定的な役割を果たすのは、二人が初めて性的な関係を持つ場面である。Lolita がキャンプで男の子とした面白いゲームをしようと Humbert を誘い、彼のパジャマのズボンの紐をゆるめ、歯列矯正器をはずすところまでを私達は目撃する。Lolita は、キャンプで体験した「ゲーム」が子供達だけの秘密の遊びであって、大人の性行為と同じものであることを認識してはいない。彼女は、その本当の意味に気づかないまま、子供時代に自分で別れを告げてしまったのであり、ここでははずされる歯列矯正器は、失われる子供時代のシンボルとなっている。一方、それは現実的な少女の口腔 = 肉体を感じさせる小道具にもなっており、そのイメージの生々しさによって、観客はスクリーンのこちら側の世界、現実的な pedophilia の問題に直面することを感じる。

同じ場面を Kubrick 版で見ると、プロダクションコードがはたらいていることがよくわかる。結婚していない男女が同一平面上に横たわることが許されなかったので、Lolita は Humbert のベッドの枕元のボードにもたれて立ち、横たわる Humbert と話す、という位置関係が最後まで変わらない。この場面全体はリアルに撮られているが、モノクロームの画面はどんなにリアルでもどこか夢の場面であるように感じられる場合が多いように、ここでもその効果ははっきりと出ていて、Lolita は Humbert の幻想の中の夢の少女のように見える。とりわけ微笑む Lolita のクローズアップで場面が終わるところはそうである。Kubrick 版にだけある場面、Lolita が関節の柔らかさを示すために、手首を大きく反らせてみせるところでは、生身の肉感よりも、Lolita の若々しさとどこか異常な感じが強調され、彼女がその若さのために傷つけられるような怖い予感がある。この場面は美しさと恐ろしさを巧みに同居させているが、どちらも夢の中の感覚に近い部分を持っている。同じ意味を持つ場面を見ても私達は現実の pedophilia の世界を感じることはない。ここで私達はむしろ現実を離れて、Humbert の見る nymphet の夢に近づいてしまうのである。

voiceover

Lyne 版の 1 つの特徴は、Humbert の語りによって小説の文章が引用されることである。上記の場面が暗転したところ Lolita と Humbert が性行為を行うはずのところには、Humbert の言葉、”Gentlewomen of the jury, I was not even her first lover.” がはいる。この言葉は小説にもあるが、Kubrick の映画にはない。この小説は全体が Humbert が刑務所の中で裁判のための証拠物件として書いている手記であるから、この言葉は事実を述べたものであると同時に自己弁護にもなっている。Lolita が彼を誘惑し、しかも 12 才という幼さですでに処女ではなかったのだから、関係を持った彼の罪は軽い、というわけだ。一方小説には、彼にとって都合の悪いこと、Humbert を悪者にする事実も同時に本人によって語られるが、映画ではそのような部分はなく、Humbert に都合のいい発言がこの映画の語りの主調をなしているように思える。それは手記のリアルタイムの Humbert、改心した Humbert の声よりも、物語のリアルタイムの Humbert の声が主になっているからである。たとえば私達は母親の死を知った Lolita が泣き、Humbert になぐさめられる場面を見る。しかし小説の Humbert がずっと後になって漏らす衝撃的な事実、毎晩 Humbert が眠ったふりをすると Lolita がすすり泣いていたこと、しかも Humbert がそれに気づいていたということは映画ではわからない。カメラの視点が Humbert の視点と重なり、彼に都合のよい独白が多くはいることから、Lyne の映画は Humbert の語る Humbert の物語になってしまっている (Wood 9)。アメリカでの公開が危ぶまれていた時は pedophilia の映画ということが問題の中心であり、特別試写を見た人々はむしろこの映画に好感を持っていた (Abramowitz 98)。その好印象は、「Humbert の物語」への共感の上に成り立っていると考えられる。実際には、小説のように複数の声を持たない Lyne の映画は、同情すべき善良な pedophile の自己弁護の映画になってしまっている。これが Lyne の映画の危険な点である。美しい映像と感傷的な音楽の中で語られる pedophile の自分に都合のいい物語を私達はやすやすと受け入れてしまう。しかもこの映画が生々しい現実ともつながっているのにもかかわらず、である。

これも世相を反映してのことと思われるが、Lyne 版には、Humbert が Lolita に暴力を振るう場面が 2 つ含まれている。Kubrick 版には殴打の場面はなく、原作では 1 度しかない。この 2 度の平手打ちの場面から、Lyne の *Lolita* は、Humbert が未成年者である被保護者に身体的、性的暴力を振るっていることをよりはっきりと示す姿勢をとっていることがわかる。*Lolita* の物語をロマンチックなきれいごとにする意図はなく、問題は問題として見極める現実的な視点を持っている、というアピールであろう。こうしたところにも Lyne の映画の意識的な「現代性」がうかがわれる。

ところがこれらの暴力の場面は、小説よりも過激で露悪的でありながら、Humbert の良心を示す機会にもなっている。原作にもある車の中の平手打ちの場面は Lyne の映画ではかなり長いものになっている。車から走り出て泣きじゃくる Lolita を Humbert が追いかけて謝罪をし、なぐさめる光景が時間をかけて描かれているからである。この場

面は、Lolita の哀れさや無力さよりは、やさしい心を持ちながら罪を犯してしまう Humbert の辛さのほうに力点が置かれているように見える。Kubrick の映画で Humbert 役を演じた Mason に比べて、Irons は外見も繊細であり、自分の罪を自覚している善良な人物であるかのように見える。もちろん現在 pedophile を主人公にした映画を作るのであれば、彼を見るからに異常な不愉快な人物に仕立てあげることが不可能であろう。それは現実の世界で多発している陰惨な事件を思い出させ、誰もそのようなものは見たくないからである⁽⁷⁾。

Lyne 版の Humbert は、小説を引用しながら、自分の言葉を裏切ってもいる。一つは Lolita に最後に会う場面である。Humbert は失踪した 17 才の Lolita、貧しい青年と結婚して妊娠し、やつれた Lolita に再会するが、そこでもはや nymphet ではなくなった Lolita を永遠に愛することを悟る。改心の場面である。

HUMBERT'S VOICE

I looked and looked at her, and I knew, as clearly as I know that I will die, that I loved her more than anything I had ever seen or imagined on earth. She was only the dead-leaf echo of the nymphet from long ago--but I loved her, this Lolita, pale and polluted and big with another man's child. She could fade and wither--I didn't care. I would still go mad with tenderness at the mere sight of her face. (201)

もう一つ改心の場面があって、それは警察につかまる直前、崖下にある町から聞こえてくる子供達の声聞きながら、その中に Lolita の声がないことを悲しんでいる自分に気づくという場面で、小説でも手記の最後に書き付けられている。Lolita の子供時代を奪ってしまった罪の意味を悟る部分である。

HUMBERT'S VOICE

What I heard then was the melody of children at play, nothing but that. And I knew that the hoplessly poignant thing was not Lolita's absence from my side, but the absence of her voice from that chorus. (225)

Lyne の映画はその両方を映像にし、かつ Humbert の語りをほぼ原文のまま、画面に重ねているが、それぞれ元の意味を裏切ってしまう。まず nymphet ではない Lolita への永遠の愛を自覚した直後の Humbert は、Lolita と最後に別れる時に、なんとそこに Humbert と関係を持つ以前の子供の Lolita の姿、しかももっとも幼く見えるショートパンツスーツを着た姿を見てしまう。意図的に Humbert のこれまでの物語が自己弁護に満ち満ちていたということを示すものであればつじつまが合うのだが、小説での大切

な改心が否定されているようにしか見えない。もう1つは谷間の町からの声がとても聞こえそうもないほど遠いところから大きく聞こえてくるための説得力のなさである（Wood 9）。前者は原作と違うことをしたために改心の意味が全く変わってしまった場面であり、後者は原作に忠実に作ったにもかかわらず、意味が変わってしまった場面といえる。

小説 *Lolita* を読む場合、Lionel Trilling が指摘したように、読者は理性ではおぞましいとわかっている Humbert にどうしても共感せざるを得ないことを感じる(14)。あちこちで Humbert への好意が冷え切るような言葉を彼自身が書き、自ら怪物であると公言しているにもかかわらず、そうなのである。小説では、pedophile である Humbert は自己中心的な恐ろしい怪物であるが、同時に永久に不可能な愛に苦しむ人間であり、同情しうる存在である、という矛盾を読者は受け入れざるを得ない。小説の Humbert の語りにはそれだけの力があるし、また *Lolita* の主題自体こうした両義性にある。Humbert の物語は恐ろしい pedophilia の物語であり、同時に永遠に満たされない愛の物語である。Lyne の映画が、その両義性を無視して、Humbert による Humbert の物語の映画を作ってしまったことは、危険なことに思える。一方で、危険といってもさほどのことはないとも考えられる。Lyne の映画は私達に感受性の枠組みを変えることを要求しないからである。

映画の公開の是非をめぐって書かれたものや実行された運動のほとんどが、Nabokov の原作に対しては、芸術対社会問題の二項対立的姿勢にあった。つまり、pedophilia の主題を扱う以上、どんなにすぐれた小説の映画化であっても現在公開するべきでない、とするものか、あるいは、Nabokov の *Lolita* はすぐれた芸術作品であって、社会問題としての pedophilia には関係がないと論じたもののどちらかであった。その中で Norman Podhoretz は異色であるといえる。彼はナボコフの小説が芸術作品としてすぐれていたからこそ、私達の感受性の幅を広げてしまい、結果として、今日のような pedophilia の蔓延する社会状況を作り出したことに対して責任の一端があるのだ、という意見を述べている(35)。小説の出版当時に考えられていたようなポルノグラフィであれば、そうした力はなく、危険もなかったというのである。そういう意味では、Lyne 版の *Lolita* も、さまざまな矛盾を抱え込んではいないものの、私達の感受性の枠組みを変える力はなく、「安全な作品」というべきかもしれない。

Podhoretz のいう小説 *Lolita* が社会にもたらした影響の危険は、現在の日本ではアメリカほど切実には感じられない。アダルトチルドレンという概念が一般化し、子供時代に受けた虐待の記憶がそれ以降の人間関係に影響することも周知のこととなりつつあるし、学校や家庭での性的暴力の存在も知られてはいるものの、公になっている事例が少なく⁽⁸⁾、アメリカでの頻度とは比較にならないためであろう。特に家庭内のそれは相当に特殊なこととして考えられている。日本における Lyne 版 *Lolita* の公開がほとん

ど問題にならなかったことからそれは明らかである。しかし Lyne 版 *Lolita* が契機となって引き出された小説 *Lolita* の価値とそれにともなう社会的な危険は、同じ現代の世界に生きる私達にとってもあらためて考えて行かなければならない問題であるだろう。

謝辞

Showtime で放映された Lyne 版 *Lolita* のビデオテープをお貸しくださった明治学院大学・大学院生吉川幹子さんに厚くお礼申し上げます。

註

(1) 本稿は 1999 年 4 月 18 日名古屋大学においておこなわれた日本アメリカ文学会中部支部第 16 回支部大会において発表したものに大幅に加筆したものである。

(2) 小説 *Lolita* の出版までの経緯については主に Boyd, Dmitri Nabokov によった。Lyne の映画 *Lolita* の製作および公開に至るまでの事情については、Schiff x-xxix の他、Abramowitz, Corliss 1998, Hudgins, Kaye, Leonard の文献を参考にした。

(3) Kubrick の *Lolita* の成立から公開までは Introduction to Nabokov 1974 の他、Appel, Boyd, Corliss 1994, Jenkins, Sinclair の資料によった。

(4) ホームページの情報による (<http://www.americanhumane.org/cpfactcommon.html>)。PCAA の報告も同様 (<http://www.childabuse.org>)。

(5) このような考え方は Freud のトラウマ理論に基づくものであるが、現在のアメリカでは「現代社会の常識」と言うべきものになっている。子供時代のトラウマの問題については、圧倒的な人気を誇る Alice Miller の著書を初めとして、一般読者に向けた多くの本が出版され、1980 年代から現在まで大きな影響力を持ち続けている。

(6) 『隠された過去への叫び』日曜スペシャル、製作統括 岡崎泰、池田理恵子、NHK、1998 年 12 月 28 日放映。

(7) ちなみに Albee の舞台劇 *Lolita* の脚本の主人公はその人物像に近い。Donald Sutherland が主演したこの劇は不評であったが、まだしも 80 年代の初めであったために、フェミニスト等の反対運動があっても上演が可能であったと思われる。

(8) 日本の場合、性的虐待の発生頻度に関する正確なデータは存在しない。厚生省児童家庭局の報告によれば児童相談所での児童虐待の処理件数は、年々増加し、1990 年度には 1,101 件であったが 95 年度には 2,722 人を数えている (ホームページの情報による。 <http://www.mhw.go.jp/wp/3-3-2.html>)。このうち性的虐待の割合は明らかにされて

いないが、アメリカと同様の割合を当てはめると 1995 年度で 320 件ほどになる。はっきりした数字が出ている例としては、古いデータになるが、1988 年度前半期で全国の児童相談所で扱ったケースでの 48 件という数字が出ている（西澤 142 43）。もちろん水面下の数字ははるかに膨大なものとなることが予想される。

Works Cited

- Abramowitz, Rachel. "Why Lolita Has Hollywood Running Scared." *Premier* September 1997: 80-84, 97-99.
- Albee, Edward. *Lolita: A Play*. New York: Dramatists Play Service, 1979.
- Appel, Alfred, Jr. *Nabokov's Dark Cinema*. New York: Oxford UP, 1974.
- Bernstein, Jill. "Tin ' Conundrum." *Premiere* September 1997: 23-24.
- Boyd, Brian. *Vladimir Nabokov: The American Years*. Princeton: Princeton UP, 1991.
- Corliss, Richard. *Lolita*. London: British Film Institute, 1994.
- - -. "Lolita: From Lyon to Lyne." *Film Comment* 34, no. 5, September/October 1998: 34-39.
- Hudgins, Christopher C. "Lolita 1995: The Four Filmscripts." *Literature Film Quarterly* 25, no. 1, 1997: 23-29.
- Irons, Jeremy. Foreword. Schiff, vii.
- Jenkins, Greg. *Stanley Kubrick and the Art of Adaptation*. Jefferson: McFarland, 1997.
- Kaye, Elizabeth. "Lolita Comes Again." *Esquire* 127, no.2: 50-55, 104-106.
- Kincaid, James. "The Adorable Child." *Seattle Weekly Online*. 12 October 1998. <http://www.seattleweekly.com/features/kincaid1008/kincaid1008.shtml>.
- Leonard, John. "The New Puritanism: Who's Afraid of Lolita? (We Are)." *The Nation* November 24, 1997: 11-15.
- Nabokov, Dmitri, and Matthew J. Bruccoli, eds. *Vladimir Nabokov, Selected Letters, 1940- 1977*. San Diego: Harcourt Brace Jovanovich, 1989.
- Nabokov, Vladimir. *Lolita*. 1955,1958. New York: Vintage International, 1997.
- - -. *Lolita: A Screenplay*. 1974. New York: Vintage International, 1997.
- Podhoretz, Norman. "' Lolita,' My Mother-in-Law, the Marquis de Sade, and Larry Flynt." *Commentary* April, 1997. 23-35.
- Schiff, Stephen. *Lolita: The Book of the Film*. New York & London: Applause, 1998.
- Sinclair, Marianne. *Hollywood Lolita*. London: Plexus, 1988.

Trilling, Lionel. "The Last Lover: Vladimir Nabokov's *Lolita*." *Encounter* October, 1958.

Wood, Michael. "Revisiting *Lolita*." Rev. of *Lolita*, by Adrian Lyne. *The New York Review of Books* March 26, 1998: 9-13.

西澤哲一。『子ども虐待』(誠信書房、1994年)。

Baby Doll. Dir. Elia Kazan. With Karl Malden, Carroll Baker and Eli Wallach. Screenplay by Tennessee Williams. Newtown, 1956.

Lolita. Dir. Stanley Kubrick. With James Mason, Peter Sellers, Shelley Winters and Sue Lyon. Screenplay by Vladimir Nabokov. MGM, 1962.

Lolita. Dir. Frank Dunlop. With Donald Sutherland, Clive Revill, Shirley Stoller and Blanche Baker. Play by Edward Albee. First presented at the Brooks Atkinson Theatre, New York City, March 19, 1981.

Lolita. Dir. Adrian Lyne. With Jeremy Irons, Frank Langella, Melanie Griffith and Dominique Swain. Screenplay by Stephen Schiff. Lolita Productions, Inc., 1997.